

大学・高校の多様化と大学入試

坂元 昂*
メディア教育開発センター

University Entrance Examination for a Newly-Diversified High School and University System

Takashi Sakamoto **
National Institute of Multimedia Education

Abstract In May 1997, 16th Central Council for Education issued the report "The Model for Japanese Education in The Perspective of The 21st Century (First report by The Central Council for Education). There the Council emphasized respect for the students' individuality and proposed the practical strategies and tactics for improving university entrance examinations in order to decrease excessive competition.

Most of them are already more or less undertaken in current university entrance examination systems such as integrated, multi-dimensional evaluation on students' individuality by means of school report, essay, interview and recommendation. Moreover, encouragement to university admission in autumn term, increase of quota in the later stage of the separation and division system, participation of high school teachers for making test questions in the National Center Test are newly recommended. One of the most eminent feature is the exceptional admission for gifted students. At the moment students who have talent in Math and Physics can enter university one year earlier from 17 years old by recommendation without regular examinations. The Central Council stimulates to diversify university entrance examination procedure.

High school students who have been educated with an increased emphasis on development of their individuality under a more diversified educational system are now entering universities, which, in turn, feature diversified characteristics. From the viewpoint of universities, applicants are screened and selected for admission. From the viewpoint of students, they need to screen faculties and universities. Entrance examinations should function as a tool for optimum matching of students with universities.

1. 第16期中央教育審議会第2次答申

1.1 生きる力

平成9年6月26日, 第16期中央教育審議会は, 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第二次答申)をし発表した。

これからの教育は, 「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむことを目指し, 個性尊重という基本的な考え方に立って, 一人一人の能力・適性に応じた教育を

展開していくことが必要であるとし, そのために, 学校間の接続の改善, 特に大学・高等学校の入学選抜の改善, 中高一貫教育, 教育上の例外措置が重要な課題であるとしている。

「生きる力」は, 第1次答申で強調されており, 自分で課題を見つけ, 自ら学び, 自ら考え, 主体的に判断し, 行動し, よりよく問題を解決する能力・自らを律しつつ, 他人と協調し, 他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生き

*) 連絡先 : 261 千葉市美浜区若葉 2-12 メディア教育開発センター

**) Correspondence: National Institute of Multimedia Education, Mihamaku Wakaba 2-12, Chiba, JAPAN

るための健康や体力
の2つの要素からなっている。

この「生きる力」を評価する大学入学者選抜を求めているといえる。

1.2 第2次答申にみる大学入学者選抜の改善

大学入学者選抜については、受験競争は、長期的に見ると緩和するが、特定の大学をめぐっては、依然厳しく、入学者選抜の改善や学歴偏重社会の是正などの取り組みを通してその緩和を図ることが必要であるという捉え方が基調である。もちろんこれまでの入学者選抜に関する改善の努力を十分に認めつつも、さらに一層の改善が必要であるとしている。

その背景として、「経済構造が変化し、社会の価値観が多様化するなど、我が国社会が先行き不透明な変化の激しい時代を迎えるということを考えて、18歳の時点での試験の可否は、もはやかつて程の大きな意味を持たないようになり、その後の人生においていかに学び、真の実力を身につけていくかが重要となってくる」ことを強調して、具体的な提言を行っている。

1.3 5つの基本方向

基本的には、今日の入学者選抜が、ペーパーテストによる学力試験の偏重を避けること、自ら学び、自ら考える力に対する評価をすること、多様な個性へ対応することなどが不十分なので、次の5つの基本方向に添った改善が必要であるという。

(a) 学力試験を偏重する入学者選抜を改め、能力・適性や意欲・関心などを多角的に評価するため、選抜方法の多様化、評価尺度の多元化に一層努めることが必要。

(b) 「ゆとり」の中で、「生きる力」を育成するという初等中等教育の改善の方向を尊重した入学者選抜の改善に努めることが必要。

(c) 選抜方法の多様化、評価尺度の多元化などの入学者選抜の改善については、全体としてかなり進んだものの、影響力のある特定の大学における率先した改善に努めることが必要。

(d) 学力試験を偏重せず、多様な選抜方法を取り入れていくなどの改善を進めるためには、様々な条件整備や進路指導の改善など関連する施策を進めることが必要。

(e) 入学者選抜の改善とともに、特定大学への受験

競争の緩和を目指し、大学相互の垣根を低くしていくため、高等教育全体を柔らかなシステムとしていくことや、大学教育の充実と学業成績の評価の厳格化を進めていくことが必要。

1.4 具体的な提言

具体的には、ペーパーテストによる学力試験偏重を改め、1点刻みで可否をきめるのではなく、それぞれの大学や学部の特質に応じた選抜方法の多様化や評価尺度の多元化をさらに徹底すること、初等中等教育の改善の方向を尊重した思考力を問う問題や総合問題の出題、調査書、小論文、面接、実技検査、文化・スポーツ活動やボランティア活動の積極的評価、大学や学部・学科がそれぞれの教育目的に応じ、履修科目やその到達度について予め一定の要件を提示し、調査書によって履修状況を確認する履修科目等指定制の導入、社会人や帰国生徒に対する特別選抜、専門高校や総合学科卒業生のための特別枠の設定、学校指定の推薦入学枠の設定、地域指定枠の設定、障害のある者への配慮、同一大学学部での複数選抜基準の導入、後期日程の定員増、秋季入学の拡大など多岐にわたっている。

なお、推薦入学に関して、自己推薦制度を設けることや社会教育団体・地域の団体・スポーツ関係団体などの学校以外の団体による推薦を活用することも提言している。

大学入試センター試験については、問題作成などに高校教員の協力を求める、センター試験の得点が一定水準以上に達していれば、個別大学では学力試験以外の資料により入学者を選抜するなどの取り組みを推奨している。

また、センター試験で判定できる能力について個別大学が再度試験をすることを避けることを薦めている。

これらの要請に応えるべく、また、平成9年度のセンター試験の反省も踏まえて、現在大学入試センターでは、高等学校関係者の関わり方について、得点調整について、平均点の中間発表について、旧科目の出題について、慎重に検討している。

1.5 入学者選抜の改善を薦めるための条件整備

丁寧な選抜を実施するために、アドミッション・オフィスを整備すること、入試日程を若干繰り下げること、大学に関する情報提供を充実すること、マスク

ミに受験競争をあおらない報道を求めること, 大学入学者選抜に関する外部評価を取り入れること, 大学入学者選抜の実証的研究を進めるため, 大学入試センターの機能を強化すること, 単位互換の拡大, 編入学・転入学の拡大, 社会人入学の拡大, 休学や復学への弾力的な対応などによって, 形式的な学(校)歴を偏重する意識を変えることなども提言している。

1.6 飛び入学

飛び入学は, 当面, 数学, 物理に希有の才能を持つ生徒を, 推薦で, 17歳から大学入学させる制度で, 徐々に, 他の専門分野での優れた生徒に広げていくことを見越している。必ずしも理数学部数学科, 物理学科に進学させるとは限らず, 理数系の関連専攻で力を発揮することも期待される。

これについては, すでに, 文部省は, 平成9年7月に関係省令等を改正し, 平成10年度から大学に受け入れを可能にしている。具体的な動きが出てくるものと思われる。特に, 有力私立大学などで, 興味深い展開が考えられる。

2. 高校教育と大学教育の接続

2.1 高校教育の多様化

高校進学率は, 今日, 97%に達している。ほとんど義務教育なみと言ってよい。このことは, いわゆる学力の優れた生徒が高校進学をするのではなく, 多様な能力を持った生徒が高校で学ぶことを意味している。大学入試に関しては, 従来, 普通高校卒業生が主な対象であった。しかし, 平成7年3月の職業教育の活性化方策に関する調査研究会議の最終報告「スペシャリストへの道」の提言によって, 職業高校が職業に関する完成教育を目指す従来の性格から, 名称を「専門高校」と変え, 職業に関する教育の基礎・基本をしっかりと身に付け, 大学等におけるスペシャリスト教育のための継続教育の一貫として位置づけられることになったので, 新たに, 専門高校から関連大学・学部等における専門教育への接続を最適に行う必要が出てきた。

加えて, 平成6年度からは普通教育と専門教育とを総合的に行う総合学科が設置され, 設置校が, 平成6年度7校, 7年度16校, 8年度22校と増加している。この卒業生も大学入試を受けることになる。

そのうえ, 平成9年度には, 現行学習指導要領に

基づく学習をした生徒が初めて, 大学入試を受けた。

現行の学習指導要領は, 前のものより大幅に多様化し, 選択幅が増えている。したがって, 様々な科目を履修した生徒が, 大学入試を受ける。

とくに, 社会科が地理歴史と公民の2教科に分かれ, しかも, 従来の縦に並ぶI・IIの系列に加え, 地歴と理科にA・B系列ができ, 数学が, I系列とA系列の2系統になり, 英語がオーラル・コミュニケーションを重視することになった。

これらの多様な選択に対応して, 大学入学者選抜の方法も必然的に多様化せざるを得なくなった。

2.2 現在の大学入試センター試験

従来は, 大学入試センター試験では, 国語, 日本史, 世界史, 地理, 現代社会, 倫理・政経, 数学I, 数学II, 理科I, 物理, 化学, 生物, 地学, 英語の5教科14科目に加え, 専門高校生に対する配慮として, 数学IIの枠に簿記会計と工業数理の2科目, 合計16科目が出題されていた。それが, 平成9年度からは, 地歴と公民が分かれたことによって, 6教科となり, A・B系列や倫理と政経の分離, 総合理科, 中国語の新設等によって, 31科目を出題することとなった。

この中には, 職業教育を主とする学科等における専門教育に関する科目, 従来からの工業数理, 改訂の簿記と新設の情報関係基礎が含まれている。専門高校卒業生に対する配慮が一段と深まっている。

なお, 移行措置として, 旧数学I, 旧数学IIと理科Iを過年度卒業生に対して用意した。

2.3 現在の個別大学の入学者選抜

平成9年度では, 日本の大学入学者選抜は, すべての4年制国立大学95, すべての公立大学53, ならびに429の私立大学の内152の計300大学が大学入試センター試験と個別大学の入学者選抜を組み合わせで行っている。しかし, 7割ほどの私立大学は, 独自の入学者選抜を行っているし, 大学入試センター試験を採用している対象定員は, 僅か1万人弱にすぎない。

現在, 多くの大学が, 特色ある入学者選抜を工夫している上に, 特別選抜や専門高校への配慮, センター試験利用の科目指定や傾斜配点, 後期日程での工夫など個別大学の入学者選抜は, 多様化している。

国公立大学では, 昭和62年度入試から, 個別の大学が, A日程, B日程またはC日程のいずれかの日程

により, 試験を1回実施する連続方式と平成元年から個別の大学が学部の定員を分離し, 試験を2回実施する分離・分割方式が行われており, 大学入試を, 多様化はしたが, 分かりにくくもしていた。しかし, 国立大学は, 平成9年度から分離・分割に統一され, 公立大学も平成11年度から, 原則として, 分離・分割方式に統一される。現在, 前期日程に比べて, 後期日程の定員が少ないが, 入学者選抜に関しては, 中教審答申に提言されたように面接, 小論文, 論文, 総合問題などさまざまな工夫している大学がほとんどである。

国公立大学のセンター試験の科目指定数は, 平成10年度(平成9年度)で, 6教科5(5)大学, 5教科116(113)大学, 4教科79(76)大学, 3教科100(97)大学, 2教科35(32)大学, 1教科5(5)大学と多岐にわたっている。私立大学では, 平成9年度センター試験採用152大学の内, 96大学が3教科, 77大学が2教科と, 国公立大学に比べて指定科目数を少なくする傾向がある。

一般的に, 科目指定に対しては, 高等学校の立場からは, できるだけ多くの科目を指定するようという希望が出されている。

個別学力検査等での一般選抜においては, 特に最近様々の試みをする大学が増えてきた。平成10年度(平成9年度), 国公立大学148のうち, 小論文を課す大学は125(119) 総合問題を課す大学は40(36), 面接104(99), 実技66(66), リスニング53(52), 個別学力検査を課さず小論文, 面接等のみで選抜する大学が138(134)となっている。平成8年度から専門高校卒業生を対象に, その職業教育が当該学部・学科の教育と関連すると認められる場合には, 入学定員の一部について, 職業に関する教科・科目の学力検査の成績等により判定できることになった。初年度は, 新潟大学工学部が実施するにとどまったが, 平成9年度には, 北海道大学教育学部, 福島大学経済学部, 一橋大学商学部, 富山大学工学部, 山梨大学工学部が加わり6大学に増えた。このうち, 福島大学では, 総合学科も対象に加えている。まだ入学者は, 43名であるが, 私立大学が10大学12学部で実施し, 226名を入学させている。今後, 専門高校, 総合高校で学習した生徒に大学への門が広がっていくと想定される。

国公立大学の特別選抜も推薦入学, 帰国子女, 中国引き上げ者等子女, 社会人に対して実施されてい

る。平成10年度(平成9年度)では, 148大学のうち, 推薦入学を実施するのは, 131(124)大学に及んでいる。この場合57(59)大学の118(118)学部でセンター試験を要するが, 116(108)大学の263(246)学部では, センター試験を免除している。

そのほかの特別選抜としては, 帰国子女105(101)大学, 中国引き上げ者等子女32(30), 大学社会人69(62)大学となっている。

このように, 大学入学者選抜の多様化は, 着実に進んでいる。

2.4 大学入学者選抜の実施状況

このような多様な大学入学者選抜方法のなかで行われた平成9年度(平成8年度)の入学者数は, 国立大学で, 定員103,914(104,264)名のところ108,531(108,118)名, 公立大学で, 定員17,583(17,083)名のところ19,163(18,143)名, 私立大学で, 定員382,102(375,538)名のところ455,922(449,399)名となった。私立大学で74,000名弱の過員である。全入学定員503,599(496,885)名に対して, 全入学者は, 583,616(575,660)名である。

このうち一般選抜の募集人員は366,267(361,302)名で, 入学者は, 420,634(471,138)名であった。全入学者から一般選抜の入学者を引いた残りの16万人ほど, 全入学者の3割弱が, 推薦などによる入学といえる。

なお, 一般選抜での私立大学の過員は48,319(50,964)名に達している。国立大学の入学定員の半分近くに匹敵する数である。

これが, 入学競争をやわらげていると言えるが, 定員割れのおそれがある大学の存立をおびやかしている。

3. これからの大学入試

3.1 多様化の中の入学者選抜

このような実態をみると, 日本の大学入学者選抜は, すでに大幅に多様な評価方法, 多面的な評価尺度を用いて行われていることが示されている。しかも, 実質的な競争率は4年制大学で1.4倍, 短期大学で1.1倍であり, その上, 約3割と5割が推薦入学であること, 18歳人口減が確実にくることを考え合わせると, 一部有力大学の入試改善, 社会やマスコミの学校歴偏重の是正があれば, 現在でも世界でうまく

いっていると評価できる日本の大学入試は、一層優れたものになると思われる。

ここでは、高等学校の多様な教育課程で、個性を活かす教育を受けた生徒が、多様な特徴をもつ大学・学部に入学することになる。

大学の立場からは、入学者選抜であるが、生徒の立場からは大学・学部選抜である。現在は、入学志願者の方が、入学定員より多いので、入学者選抜の色彩が強いが、やがて、人口減によって、数値的には、希望者全員入学の状況になる。ここでは、生徒による大学・学部選択の重みが増してくる。考え方としては、個性ある生徒と特徴ある大学・学部・学科等との最適マッチングが大学入学者選抜の本質となる。

生徒は、科目選択とその得点の組み合わせによって多様な特徴をもつ。これが学力成績の面での個性である。それに、多様な評価方法と多面的な評価尺度による個性が加味される。一方、学部・学科は、大学入試センター試験の教科・科目選択、科目傾斜配点、センター試験と個別試験の重み、理想とする学生像等の組み合わせによって表わされる特徴をもっている。大学側の個性である。

この両者のパターンを最適マッチングすることが、個性を活かした入学者選抜となる。それには、生徒が、高校時代にできるだけ多くの科目を履修し、多くの活動しておくことが望ましい。多くの大学・学部・学科の特徴とより深い最適マッチングを図ることができるからである。高等学校での活動も乏しく、しかも、少数科目しか受験しないと、生徒の個性が平板に評価されてしまう。

逆に、大学側は、特徴をはっきり出してよい。自分の大学・学部・学科に欲しい生徒像を上述のパターンとして明確に指示すればそれに合う生徒が志望してくる。

その意味では、大学が、どのような履修状況の生徒でも受験させるように、窓口を広げすぎることが問題である。生徒の個性をわざわざ無視することになる。

3.2 補修教育と先行学習

高校での選択が多様になったことの反映として、理学部入学者で物理を学習してこない生徒、医学部入学者で生物を履修してこない生徒等が生じる。そのため大学で、高等学校程度の未履修科目をわざわざ講義する必要が生じている。補修教育である。

反対に、高校在学時代に先端的な学習をして、大学では、その科目の講義を受けずに、試験だけを受けて単位を取る場合もありうる。先行学習である。

こうして、大学と高校の境目が曖昧になる可能性も出てきた。

3.3 SCS の活用

このような大学と高校にまたがる授業は、なかなか困難である。

しかし、最近の通信衛星を使った教育を活用すると実現の可能性が高くなる。

平成9年度はじめでは、33の国立大学、6の高等専門学校、10の国立大学共同利用機関に63の地上局が設置され、メディア教育開発センターの中央局の制御でスペース・コラボレーション・システムが整備され、宇宙からの大学教育が始まっている。平成9年度末には、国立大学55に地上局が整備され、国立大の過半数となる。私立大学も10大学が参加する。

このシステムを活用して、補修教育や先行学習が行われるようになることが望まれる。

4. 大学入試をめぐる7つの誤解

4.1 過度の受験競争

世間では、過度の受験競争といわれることがあるが、現実には、競争率は、4年制大学で1.4倍、短大で1.1倍にすぎない。しかも、4年制大学では3分の1、短大では50%が推薦入学である。放送大学もある。

4.2 偏差値入試

偏差値入試の弊害も指摘されるが、現在では、知識偏重の偏差値入試は薄らいできている。センター試験の科目指定や科目に掛ける配点の傾斜も大学の自由であり、センター試験と個別大学の入試との重みの掛け方も大学の自由である。しかも、各大学では、高校の調査書、小論文、面接、実技、総合問題に加え、推薦入試、および、帰国子女、社会人等の特別入試、独自の学力試験など多様な方法を工夫している。

4.3 入り口を広く出口を狭く

大学入試競争を緩和するために、大学の入り口を広くして、出口を狭くすべきであるという主張がしばしばされる。しかし、今でも、大学を選ばなければ、

入り口は広い。お手本とされるアメリカでも、ハーバード大学、プリンストン大学など一流大学の中には、入学競争率が、7倍近くある大学もあり、日本並の競争率である。その上、卒業率も日本の大学と同様に、9割ほどに達する。

4.4 x式試験の弊害

x式の試験の弊害もよく話題にされるが、現在x式の2選択肢問題を出題している入学試験はない。大学入試センター試験では、マークシートに答えさせる方法を採用しているが、多肢選択か、計算結果の数字や記号をマークして答えさせる方法である。毎年試験問題は、全国紙に掲載されるので、解いてみると、単なる知識を調べる問題ではなく、思考力、判断力、総合力を評価する問題が数多く含まれていることが分かる。

4.5 二重負担

大学入試センター試験と個別大学の試験は、似たような内容なので二重負担になると批判する人がいる。しかし、高等学校の進路指導の先生に云わせれば、センター試験は、高等学校の勉強をまじめにしていれば特別な準備をしなくてもよいが、それに対して、個別大学の学力試験には、特別な準備がいる。

4.6 資格試験

センター試験を、大学入学資格試験にすればよいという論がある。

今でも、センター試験は、大学の考えによって、資格試験として利用できる。高校卒業率の低いドイツ、

フランス、イタリア等でアビツア、バカロレア、マツリタ等が行われているが、医学部、歯学部、情報専攻などについては、選抜がなされているので、いわゆる入学資格試験は破綻を来している。

4.7 知識偏重の無駄な試験勉強

試験勉強は、役に立たない、無駄であるという論も多い。たしかに、現在の教科・科目の試験は、教科・科目の知識や概念を聞く問題が多いが、問題解決力、推理力、表現力、創造力等の評価をする教科・科目を超えた総合評価問題を出題すればよい。この種の能力は社会にとっても、新しい学力観にとっても大切であるから、受験勉強は、無駄にならない。

参考文献

(以下の3つの論考に基づいて構成されているが、ワークショップでは、部分的な解説にとどめた。)

- 坂元昂(1997.9)「高校教育の多様化と大学入試 大学教育と高校教育 その連続と断絶 第25回(1996年度)研究員集会の記録」、『高等教育研究草書』,45,56-62, 広島大学大学教育センター
- 坂元昂(1997)「第16期中央教育審議会第2次答申と職業教育」、『産業教育』,9, No. 568, 4-7, 文部省職業教育課
- 坂元昂(1997)「これからの大学入試」,『大学と学生』,9, 第389号, 7-13, 文部省高等教育局学生課